

超短編③

「郵便局がホームセキュリティ？」(20020720)

「ほんまかいな！」思わず下手な大阪弁を叫んでしまったほど驚いた。

「郵政事業庁がホームセキュリティサービスを来春にも開始」

いつものように何気なく新聞を開くと、ドデカイ見出しが僕の目を奪った。

全国に2万以上ある郵便局に簡易郵便局を合わせると約2万5千も拠点があることに加えて、全国津々浦々に、まるで血液のように巡回する配達員をいかに有効に活用しようかと検討を重ねた末の結論らしい。なんと3交代制の24時間体制で常に郵便局員が僕らの町をバイクや自転車で走り回ることになるらしい。

うれしいのは電話一本でハガキや手紙はもちろん、小さな小包程度の物なら24時間いつでも取りに来てくれるという従来のホームセキュリティ専門会社になかった郵便局ならではのサービスがあることだ。

巡回郵便局員(巡回員と呼ばれる)は各自、担当地区を割り当てられており、担当地区内の契約者に対する防犯サービスに全責任を負う。

3交代制だから、1軒の家を3人の巡回員が担当するわけだ。

彼ら巡回員は、お年寄りが1人で暮らしている家に対しては、毎日必ず訪問して家内外の安全を確認するという「フェイストゥフェイスサービス」を実施し、また、巡回員の交替があるときは一軒一軒の契約者宅を新旧の巡回員と一緒に訪問し、引継ぎの挨拶まわりをするという。

郵政事業庁が言うには、いかにも郵便局らしい、お互いの顔が見えて親しみの持てるセキュリティサービスを基本とするということだ。

これに対し業界トップのS社は早くも郵政事業庁の参入に対し「官による民間いじめである」とのコメントを発表。S社としては自分たちがホームセキュリティサービスという産業を育ててきたという自負があり、ここで郵政事業庁が参入するというのはまさしく「とんびに油揚げをさらわれる」に等しいと反発している。

S社は全国に約500の事業所をもつ大企業だが、いかんせん相手は2万5千の拠点を持つ郵政事業庁、戦う前から優劣は見えている、公平な競争などできるわけがないじゃないか、というわけだ。

われわれ消費者としては、企業間競争でより良いサービスがより安く提供されれば何も言うことはない。

超短編シリーズはフィクションです。念のため

